



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4

特  
4409  
2

つらひふニ

冬モ

霧

せぬりハやもぬそのみ里ヌクムトモリのちうれやううう  
らううう時あくちうてひがのまの夜暮。照る冬のみ里  
皆上で木のほくはくは友松のまくはくは波さわくあわ  
ねよのこくつむきやくはくはくはくはくはくはくはく  
けよめりて日引いきなまくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

これよりひや

むすめのまよしの立れぬきとそぞら城のあが

落葉

森原に神の社れ古蘆もさく風の高望に  
教もての木もかき冬枯れ葉も残れそいのちば  
毛馬山の葉はるは埋め下さゆきのうづわ  
極使保ひ者

神を厚くするの心も仕保の内へあれども、  
つりへはまあるも、志がむらうじぬ御おつはの男廣も、  
はれ、さく、武雄りあ居せ、ふみけ、は神ぬえうも、

お

おまやうるをの後まくおまくわらひ野のまく

冰

米のほんじるわくやあれ度とこ豆葉を用てあまひ少い  
信濃紙のうこきこ坂くらべ、わとわらはてもくわ

霰

室あひくねくわの板ふきにあまくまくまくの床あく

寢

みくわのわのうけゆくらむかみせ出陽の室へ人のむせぬ

おひねれを冬ゆ

二年

風わらむ枯葉よれのあ消て岸の蘆へとて宿乃大浦  
何處の草葉あめ～花葦は流てくものをよみ

冬月

まがみ流がるの海西月ほてゆう治のとうじゆうゆ  
雪かきのやのせ、いもせあく門の月はくわす  
代の面みづゑの月はくわす、白いよさくわす  
え科や晴輝の風はくわす、因みに水うそくわす  
神奈月の比う治の橋幸よせわす  
風ちなみれ立やまくわす、流てゆくわす治の河れ

冬枝

冬枝て荒のみだりは變りや伏るてゆのみやこりやと  
ねくさきけよ鹿く枝くにてまくらてるや、門折くれ  
かつよしのきれ枯葉よ風ひわらわくわく  
千鳥あくわくの法の傍へら浦つむじの冬枝くわく

雪

ぬまひづよはつもくがんたふみのあまのれすのう雪  
ひとせの音は終へる里残すのうひと雪まとらふ  
ちゑのあれお神うりの雪ちれ園うらむかよ、  
杉へとやひきて吉野あら櫻の尾上つむじ雪降  
ちゑをすりけて降雪よろの向ゑ、あせりとくも

往々のつひれをれとあらんけりとあらすれと  
さくまくはすくまくし野ともほすめうらもくち  
鯨より浦の松より雪波アリキリてスカラカラ  
すのうえ舞を便ニタマムホシムカマクハ

雪波

いづれとあらすれ 雪波旭きえねのやくらまわいと

雪波

やくわからひかわひ冬ふきちのへから城の旅ひハ  
船の経波ひづるよきとん鴨の河ふと雪のふきとハ  
松行や田サの水浪のそぞろ流れとよ雪の流れ

但馬のうきのうきのうき風のうきを飛渡のうきのうき  
冬ふきと雪のうきは三越波のねのあらはうきのうき  
被雪のうきよがうふ法ハ前戸をぬくと里の門

感懷

九重よハまほつみよく雪の下よ埋りそむや松原入  
ほむのあむれハ先う思ふすとひもひもと下筋りとて

狩

ちうの御宿のうきと野秋のうきとよ野秋のうき

水鳥

匡様のうきとお漕りとくられうきとくくに荒野

風すゝへ、向こよまと群がりて、荒のあられも、鳥

波のうちねのそよごように鳥のあはうひて、波のよみぢ

翠池浮鴨

ねのそよごよみぢ波と、冬の花よみぢう鴨とも、私

千鳥浦

ほ磨のふろ松の風やまきさん生田の浦よちうりうかわ

大井川をい荒のふ松も、影もれ湖と千鳥よみぢ也

綱代

起ぬよすう波の河波よみぢ、綱代よみぢ波裏のれば

カツカ波よみぢわくわくお波ちあくうんう波の里人

冬の梅

こめもよめのねくゆり、残梅からよまきすうひ  
絆波にやめ候冬の浦風ようむきてひく梅の初も  
枝落よみぢる波の岸うれひれきけ引梅も一ひと  
ひくくわとえのかまくらむらう梅よまきすうひ

伊ふ

群波よみぢの山もとれられて、おひ風すくとひ社あれ  
御名とくとくの法あみけむとせきとくとく

追儻

まよてやうと思ひまうて、うかぐ人のまよつあひ

果

音水の音羽川もあわてぬめどに、はやまうきわらわ  
たるく、安きことかみす日れをもあくわせむよつまく、

田舎よゑへ

をやみまくと年も暮るすか、はまはまくおへぬか  
とのそよが、田信郷どひあて、めづらしく、おのひ  
ときくまく事よ、寄中の景巻がよみてゆせば  
へ立たうりんとてりぬ試こうくよやとゆくろ  
えくふ、見まく、信美のあづかふ、おもむきてよと  
てつみまく一秉、

うつせみれをハ浦よも、我をよ、板井一小舟、沖ゆハ  
風とアシム、湧てのひさかてぬよも、あわそ道も、波  
のまわす、ハコは械也、ちもぬきをや人皆ハちもすも  
あーと、残せよ世のもれ人、テ、新波江の瀬は、童葦、  
ひもれがくねとう思ふ、うろつ、もぐらまくらまく、枕、  
まくらのうれとおくれ、うろくとやまく、おの月乃、  
あつきひまく、夏虫、やせられ、一重アタリと、表  
ひもよみよめれ、ハ秋されハ、いちそよまれ、ちのゆ、  
きてえれハ、月夜ハ、音てうづくら、我歌、あせもあづ、七  
月れ、夜きよめし、月のゆ、おほ、翅うりよまく、

もくあれと、冬をぬの、神せぢうえ、やさしくて、まぐれ  
の雨れちうれ、おどりて、ひめゆるあられ、わびて  
うあら、あらあれと、をへぬれ、うわねよ、まの穂きをめき、  
わらうる、人のうけまつ、まひじ、我まくまく、こをそ、  
まばらうる、西の市よ、立たまうと、ひんづつめ、市よ  
も出ぬ、あいりのひのふの家よ、庭老、うとうまわとく、  
がん詫と、取て、しきひ、まき鍋よ、湯わづ、酌く、あく  
むの東づきと、むづふとあそく、

右寛政五年六月、漂舟あまく、亥歳  
冬十二月廿八日未時死、

歳時夜と感懷

じ年やぢうのとくそみだらわ、いれかうあくう、あく  
ふれあくゆく月日、だらかに、とくぬ重荷と、弱車、えと  
ものづりよへ、はしけたるに、まひじ、ま經くと、  
白浪のひなまく力よ、さー来て、今のはうて、めぐらしこよ、  
うやまくうふ、ハ残のこゝを、まほの、久方たちのまよ  
人、おうせのよひと、あひ、せんづひとも、むのひのまよ、  
楊花等のそよわよ、ぬちよれ、一束の風よ、あがるうりん、  
まゑの、みまくわのと、やまよも、園代もよも、あ  
まくと、所の様の、まもと、思ひとおと、表の守、

登のあらわれ、とどめう、赤紫曳ち、神のめつゝもせ  
と、ば年、傍うのそそあくの、東延ゆく月日、書、  
て、月もがれぬ、其匂の、入ぬるゝと、すむれをえ、黒  
き御車、とろく、よみちふ國よ、出で、け供の人  
も、新もみづをれ、よくよう、あゆこやつも、まく  
うみの、やあへぬ、弱車、ひれをあえ、薄生の、竹  
こめく、じめうと、かりそもの、船、とくも、お  
れとも、ふたまう、命をよせん、おのと、想をよも、お  
ほき、あまく、とばあうと、なにけさうあひ、う  
きとし、

反旁

立まく、とよの、坂、うるて、とばう、とりう、染けん  
弱車、とよう、ふだう、の、おと、老うの、たかせつひ、坂

右

國母御糸きえ大路、と高麗、相、近、周、ス、斯作、

年、つゝりて、も月の、お月や、やうりと、皆と、めうと  
たまふ、二月つ、の、ちき、め、御、す、と、まく  
し、行、れ、と、せ、お、ふ、ち、わ、く、と、て、あ、うと、  
年、ま、と、う、と、れ、じ、ま、ま、う、わ、ま、ひ、わ、れ、て、う、あ、う、わ、

容含感懷

まつら、月日あよよ、まみゑ、秋の秋窮、かく  
はらや月のまづれのあわそりと、もくけよ、  
ひせきもみ、神な月、あづれの雨、晴空、雪よ  
れよ、ままで、久ーとそり、其年と、十と二十、四十、  
老の初め、りづみよ、まわぬと、百足と、ほめを  
ハ、あよあよ、わざと、あわせ、ようよ、いわて、お  
まに、枝つるやなう、みれれ、七瀬よとくよ、ばくす、青葉  
ゆめ、何うう、せよううんううと、我らもみる  
の、葉あらううの、ままで、せよあくしと、庭のひが、涼  
ようちよ、白ふの、まれううあう、霜ううか、かくわせよ

み松の戸と、まく、まく、まく、まく、  
ああふげ戸ひく、まく、まくわすよ、

及高

浦宮うねゆうひく白雲の、たまゆの、だよおじて

其二

年下、はくまくと、とを浅、一日の、いじつむ、  
もくし、み新ううき、まくはしよ、とまく人の、まくはし  
ゆくよ、まく、ゆくの、ゆくへ、神玉称玉、まくはし  
し、ううやが、よこひゆく、ひたぬ、まく、まく、  
うう、浦宮さく、宮の、水鳥れ野の、だよ

村、うわやよ、あれと、六ゆゑて、おまえ居らへん、せのくに。  
おもわきよくは、席へり、ひとわあらす、けよも、  
されよあれも、ゆゑひれ、衣ふるまといひたうよ、後  
のをつめし、うくのそぐれも、

反歌

生死のちうのあれやつ風よがりてあまし年を経るも

雜歌

え

八百あ千うつ神の林をもうえよりて後ともうけ

な

久方れのとくぬまよみ初とあやよ穢がみてたゞ梯の神

星

罔すひゆふまかとけやけひののかきあわせり神也

キ

晴空う人のひよくわれいさのまひハかくやくわ

鳴雲

うれしかまめのうら花をまかひもさく風の匂の  
そよご帰の情

あのうへと花はわかれふ初風よハ、が風うどい波を

青鳥

波くちり哉より深てものと野よす風うどい波あれ

煙霧

夕きのきよれ縦の窓松、烟よすくまくもむる

雨

三笠野のよひよへんと花はよ雨、まくまくわくわく

夜

白あよ消はれぬわしの命と人ハきのむかは  
風

東向の桜原もよきて吹風よ初風もよみれ神のうゑゆ

さひてよでよみる都カよふ風もよみる出でよみる

ふ

ちよふあつれきとすうと波きゆ風ハ、うきよくまくわ  
阿翁多理我どうねをよみては松のよきよみるもか  
あ代の國は波のうのくとあけいぢようとされ神  
風の浦や千島の底よきれり、いわふきとちきのこく  
ちよくすけともよねまされじよきよア、あくし引

消す雪うちりもみか月れらのまうの夕立れ雨  
彦系の雪あらぬよ終日も不二行くすらうされ  
若松の雪消してまたうのかせらるまとよしむ

雪

雪あてほくさゆんみほきのひと風煙うるぬ

雪

下野や那波の後ゑもふとおひを一めのやうの約

野

し雨の残はるよぢりて野ある小川もまくわ

雨

このあへ涼すくらへ百恵のわらわうこそ冬はあよ  
伊豆の浦と清てれハ涼すくゆの小鳩よすくらうし  
うみのうもあらぬまくひ神よハ波のみぬれも

海上眺望

うきと出く紫日は波の上ユスニのすみがるゆとむき

河

津國よあらとあら玉川ハやれくまえ流すわくあ

えねづちかつてよくわ越れしはあ湖つとお水みよて

あれいもの水原は消すとくよふくよづくの湖

河

池

かの内なる狹ひの池は度ノれ、福多うつもみわすら  
そくのうらへてじやくせらひのち度ノふまのち池

宝部

神をうらひきめで國士とだひれおきくわがわ  
乃重れ田がよ松木屋もまくわと古事記され

神社

神よりうま木の段のあら初とねの一あら造けられ  
里をま野中まくら神社あるとあらひすら

寺院

三三三

小初聞のちもむ室のうちれれとくよなしも達のうれ  
室のうちれのうれ乃寺とくよなれとくよなれとくよなれ  
今くかく行わ月れ九重のあれ寺とくよなれとくよなれ  
わくよなれとくよなれとくよなれとくよなれとくよなれ

門

津

きのうへはの瀧のうれとくよなれとくよなれとくよなれ  
のうへはの瀧のうれとくよなれとくよなれとくよなれ

翁

翁のうへはの瀧のうれとくよなれとくよなれとくよなれ

田庵

引くへふ田のひれ縄引てちよへまされ岸のうせ店  
窓

寒れいもすきもひてぬと森涼はあくら人のまくは爐火  
法の所乃おもゆる室の孤やれくれめくわの風へま  
せ

竹窓雨

ひさめにえらう窓よ桜竹の葉さううむのむあら

軒

御室ふ都のよしれ錦織おもてよ舞をよせよ

閣

あふ坂のゆきぬ園すくらまくすくとどうよるへま  
傍

あ葉くへわの井ハ雪す埋れし仰のつてまくは急

篇

百半とくうかきぬ古扇び一まくれ袖とかづ

うおおひきの山草のみさわよわくまくはせ

樵父

ちあうや小波まれのゆれはまほのねひとくわのよ

漁父

ちの浦は涼しげうに橋洞洞いや花とちくわんに  
熱々

ふ川の音はねじらるるうつ思ひのけい橋のゆゑや

傳へゆる

やれのや蘆ようれえ鳴きよれく松よがんよやれ

おひづわよわ

おはな城をぬる立田のなむもう草よ日ひによ

おもてう

たつとハようよかのまかのまかのまよ人せあひ

博一の木

あさりよも先ぬう人のふれどもとむとむむす  
三三キモウ

こきせうぬ後まくけはあほのふよれよまきよて

月づつ

今んよりせうへ我おとせとおととよくわく  
一あく

渴つて一矢のうのまの床にうつて我おとよくわく

不達

たらうねのゆきせし我とくのまの音おとよかの音

片言

やくよらうむわぬ風のまよひすまよひすまよ  
うよひすまよ

引あへるとのつう法をみて候とあんうと書也

梯より

チワムラあれ礼やち様のされしとてあひて、  
ふよま

祐のりよがくよみよめにへんよあれられ  
病ア

礼のよきれ葉風のまよひすまよひすまよひすま  
やくれア

塔柱もさひあはれハヤハ花もねまし残とのむせお  
竹もやま野のアレとよみがへよとくせせせせせ

よのづいろ

さかよのむくわくわくわくわくわくわくわく  
多シ

わくわく、我とうみん縁にておまほぬわくわく

夏

思もぬぢらむれどよれよれよれよれよれよれ

竹うちにけた

きあむらむれどよれよれよれよれよれよれよれ

野波無人舟自横

冬枯れ野川の風もよがりてあもしやひらわたり呼聲

世人結交用黄金

交わるとみゆじむふせの人にひのくにまほにけり

白眼翁<sup>二</sup>池世上人

よのせれんとましはおのづこ塵をき度をかねの下沙

悔<sup>ニ</sup>お夫婿<sup>ニ</sup>見封彦

何よ<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>す<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>殺<sup>ニ</sup>を刀<sup>ニ</sup>ものと<sup>ニ</sup>かかくせりあ

詞<sup>ニ</sup>与<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>背<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>將<sup>ニ</sup>辭<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>論<sup>ニ</sup>

我<sup>ニ</sup>そ<sup>ニ</sup>ち<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>れ<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ぬ<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>は

元興<sup>ニ</sup>ちれ傍<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>る

瘦<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>て<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>野<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>引<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>そ<sup>ニ</sup>

畫題 初夜晚來微雨

澄月

よ<sup>ニ</sup>や<sup>ニ</sup>れ<sup>ニ</sup>夕<sup>ニ</sup>れ<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>鳥<sup>ニ</sup>旅<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>ぬ<sup>ニ</sup>き<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>

笠翁

緑<sup>ニ</sup>小<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>や<sup>ニ</sup>れ<sup>ニ</sup>木<sup>ニ</sup>流<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>ほ<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>家<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>火<sup>ニ</sup>

み<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>波<sup>ニ</sup>れ<sup>ニ</sup>キ<sup>ニ</sup>九<sup>ニ</sup>雨<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>み<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>つ<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>ほ<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>

立齋

槁<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>野<sup>ニ</sup>川<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>岸<sup>ニ</sup>其<sup>ニ</sup>木<sup>ニ</sup>立<sup>ニ</sup>き<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>木<sup>ニ</sup>す<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>ろ<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>

夕方水よきは雨ハやれども物のよきわ

海島暮天舟泊圖

名をかくぬ沖の小舟れ磯枕夕波よき物の風車

湊舟図 天地一釣竿のひと

あくへう一船の舟を系るがよしわ

月下茅庵のう

えゆくよおやじまくら金魚の光とまづ月をさわる

山岡よひ立わ

桙もく山岡の岸はひとうねまつめ、あくわ

小松よきのうき

ゆのよきのうき風もくと小松よきのうき雪

手練胡鬼の子

鳶の羽鷺の子とよすて百千ともく桙よきの日

河柳三日月

涼みよきの里人河柳ひの柳よきの日よきの風

鶴鈎石上よ桙ふ

いのよきわのうきわのうきわよ桙ふ鹿印かな

池水より千鳥群ふ

冬の北れよ波よう曉よ、わくぬ夜よとよ千鳥群ふ

おまえ、お前のおかげで

卷之三

レナリスの説教、我等もさうおもつた

卷之三

りみちへれどもやうと席はひとまつらひゆてゆく  
毛うそひわくへのうきてほふよがひうらとうさく  
蜃氣は破つわせ上をすらるる  
ひの守れとのりへりもはまよゑきてくらははとく  
きのゆゑはまかわ月とよそそ  
もとおわまきの風のとよそそをあわせゆく

楠公說

ちう思ふがよわりせへ、歛ち方とまくらは、ひうあへて  
君づくはあともまくらたばの神もまくらへあらうじよ  
ほれあるを、あふまくらかはりふるをむねにわらわ

浦壁子  
古事記のとくへも國よも御ふるわ  
東方朔偷桃  
まことひの盜也あがめすを後の世アシガハ傳へて

言の葉も人の言葉もおのづかう。教はあふやの思ひ

東方朔偷桃

六  
影仙

潤潤の

秋葉の處はおもむり 安らかとおもひよしやまく

能因室よわが

いつかと我らのゆきりまふたのまでもあゆる

道性偶騎

あともだんのひだりも背をまわすらかゆも約

西行猫の火爐よもやまち

杖笠のかみはいとう描れぬるの所れうれまつて

雪中冬聲

涼雪よ羽くみづぬる夜の詩かへと詩せらるよまよ年

小原女の余り脇しけ煙くわくわく

休ひてあよゆゆの煙ようれせまほのせよしひまく

旅人雨を凌てけり

みよく野の花よむれりうれり雨やめてもひまくら草

廻ふ雨

白きのよれのうかと思ひと來まとうか雨をまかれ

緑毛毬

こもれても緑の衣は位のわづかむれもくもくれ

詠ひしとふ

わらわの鶴むすびあひたあひ秋の風むきよ

松より月うけ

月をみて松より月が如き秋の夜、清き如き月はおひやせる  
比枝より月うけ

あまくねの月枝のこむれ暖いわくもぬ先づ思ひ出みて  
先梅

さくらんぼくわくとれかむらの先本の袖れきの初月  
立鶴

あれええええええええええええええええええええええ  
の鳥

あくのうづくまのめくづきとくづきとくづきとくづきとくづき

其がくふよ

釣糸よ泊まみきつてくらまえ伊吹のふおりくれ風

早友迎門の園

うみ芋かなえもつの國とそ國のゆれわらひ、かや友も、  
神のすもしれ、百恵の小戸れ汐わひ、激まもて、真かち  
ちぬよ風御て、漕じうわれび神のねうな、ハ鯨うく、  
ちあゑの西をくへ、かつ圓うせ、のくゆきて、ぬかうゆ  
く、浦の磯圓よ立て、くまほよ住ぬる里を、たひの浦と、  
よひづくいがくへ、やあとすのくい、宵ともなる、ゆよ  
煙うち塙木よわきよひく、波のよア、すまよよ、延

のあれいうち、あわと、消しゆめ、あゆみ、枕刀と、波の  
あまくさ、あくよ、ふ風を、いへ來めよも、

反歌

わみづくは、かうて、お荒煙の干すもみつも神のまよ  
ゑ神寄極女宅本古墳作前

うせうのせわくうきも、もくづくも、立を  
ゑ、高きしやへと、おのうとちくれうのと、ちくれうのと、  
捨えへは、うまのゆうあれ、世のむら、うめうめと、何く  
も、ちゆわく、うなとやめの様くらすて、もやう、猶奈  
の湊、ようちねの、うぢれ、て、涼のむか、かのわく、うわく、涼

なま、魔きてぬれ、うれも、歩くもあら、がくせん、も  
もくへく、ひあらまは、まかとひくと、およひよ、うひ  
まくみ、年月を、息吹く、く、く、く、命むく、れ  
かくして、じ神家の河隈、夕汐、行て、よし波と、れと、  
ふ船、玉簾と、ひまもなし、れ、あよし、せ、おまつと、  
きく、よし、かよし、ひつまく、く、じ野刀との、あ  
みく、わあ、まく、まく、れに、ひく、む、向う、

お水女の水之奉多國方師傳記

加藤田信美之新家歌

挾ふくじがくく、ひまく、あやたく、もみ

ま、神れきの、けらき、だりれま、うきあま、け代の、西い  
え松の、千葉をせし、ハ枝葉おひねもひ度くわ、あくせよ  
つゝう、あきの、あよめあて、夜の守、宣の、み、やよせ  
る、龍れ尾をもと、部の橋をわたりて、うへと、おむすれ  
うち、汝子れが田の民、くとをめれ、は、じきをせどの、れ、鴨の  
河岸、つきをもと、えねくわをめ、生木板、えくわをまく、はくひ  
り、告れうまか、はくまくまれ、ちくくと、ちくく、うみの、みれ、ま  
く離まで、仕次んぬくせ、へ方きれ、相つはせ、れ、の、れ、  
いつ蘿の、れれ、りつす葉をもと、

反歌

つい立つる、新宿諸人の、ほくを、傳説よ、歌  
き傳ふ、本音は、東行う  
あつま、は、もとけ、わきわ、わくとみ、西の、けらき、  
うか、河みよもひ、ぬてゆく、馬よ、駿も、も本立れ、  
ふとせく、ゆく、人の、けりや、は、もんさく、も、作ゆ  
きく、う、不二の、年を、行よ、とく、ん、サ、み、う、後河の國  
と、なまよこ、は、黒髮より、う、体豆相持、國の、とく、立  
まく、う、う、とく、ハ、う、漫の、も、百、とひと、法よ、う、  
きくめう、れ、れ玉、ハ、ふ、う、や、ハ、あ、う、う、う、ふ、れ、れ、や  
ち、ふ、神わく、造り、み、う、う、立、ま、ま、よ、く、く、

むきのえうよ、毛岸、葦の浦れ、因子の浦ふゆるれまゆ、  
みきくちのむねいもん、浦の浦れゆふれとて、ほつてりて  
おれせ、ゆわんは、やうぬれり。

小浦萬葉をもくすとひゆー時、翁もうれ  
琴、鶴の琴也やまくと、うきわくせ、あくせ  
うれくよ、あくよ、

かわとの二あれねのきくわひくわのきくへやくへやくわ

翁

か法のちく年のねも初の辞くらゆくすけちあくわ  
ニホのねくへの序の夜かせよ、年はきく立くわ

三五十三

いひよくわのわき、翁せとまくへ时よ、  
玉答れ絃くらくへ、さくきのふくまれねよく秋の辞  
南禅寺の翁もまくへ时 翁

あくとも翁のふくまくハ湯くろくろくわくくわくわ

我底れまくれ石くまく翁水のまくもくわハ人間すかし  
年のきよハいつて岸とて、くらくらくらく、よみて  
へやくへやく、

うみ火のきくまくがまくおもと思ひをわくは友へるをわ

かくへ

翁

ひやうかひよをれゆらのまくわ  
ひやうかひよをれゆらのまくわ

の内の國よりひゆ人のわがて、まろあわさか

のやうに、  
まことに、

お向あよわわとおまもとつち高かが  
月のあらわ度くわくわく  
こまゆひつよやうみづさりおとひた  
せふ

トモシテハシマリタマシテハシマリ  
トモシテハシマリタマシテハシマリ

卷之三

風の上に、ちやうどかねて、風の上に、風の上に、  
風の上に、ちやうどかねて、風の上に、風の上に、  
風の上に、ちやうどかねて、風の上に、風の上に、

人也。不以爲子也。

むきよひよわきのとあくらうよけ庵を鶴の床といへり見え  
庵を鶴居ともすへ、聖人鶴居驚食の謂よ  
めえ、鶴ハ鶴居寺と云ふよれまわしひ

まよわちやかくへて、まよあらゆるもん  
りてひよくわかわくわかく、  
我あわやかくのをよせわからうむらはまく  
ちづけのこわれとまよ化せて溢きとあつひて、  
風を入れほりとくよつわく、のまくわくえ  
とて、わくまくまく、  
岡男鳥くまく、友垣の中にやく、同くくくく  
くくくくがくくひくわく、病て儀よ失  
くくく打泣て、  
我うと思ひまくすておせんおれのまくすて

あるのをとふか、たまつてうわうわ友をあへ、かつて  
うるわすやうだまわ、うるわす人をうるわす後  
は友とてわざあくまぬ、  
脱りて一まじ衣わてあむづれにせり  
或人をうるわしひ、えられ  
おまのきなとたまわせりひまくらはせ  
とまつる一斗をおきて、  
ひまわの夜やまゆせりひまくら、のりとまわせり  
お井何々と云う謡曲の上を、七十のがとが  
あ

嘗のぬれ竹のわくをせらむとひづりわ  
ちまくぬれ船をかうて、いもひのまく海に  
ひつて晴れる。

かまわぬへよみひきもて、え林とすく代とかくこあくよ  
あもや人とれむと、けまわて、ゆくすもと  
まくのくよ、わくよあるとくわくらふもばく  
一鳥れかくよくわく、えあつむまくと、よ  
てくはくへ

くくくも波よくうくくく厚ちよどみをれむうれ  
ゆくくく、ろくよくくくくくくくくくくくく

あらわく

四天寺圓錦

三ま

ま水と八五房の洋國れらそ

ま水すやけ、ちとまよせとまよせ、かよわかう  
かうみと、まよせと、まよせと、まよせと、まよ  
はくまく一音れ聞とく、うく、うく、うく、うく、うく

私

か穢とさすようと、四つた私わやし、代も例ものうゆ  
ちまくも絶波のあれ船なまよ帆をすつて、出だる人  
車

ひくくへくう市とれ小半はく、秋ねとくうやくとく

馬

中々う翅ハわざん一々よきも十けどりてふ甲斐のくろ豹

牛

五育更の鳴さざかみてそまかくは水田のわゆうへとくわ

犬

走ひくよ垣りあがりおまむくよくちゆを思ひよき戻  
戸もくせあ野ちの門よりとれりかかく御ようだれ何とくわ

猫

たゞ家をいはれくよまきひくとも一矢よなうか猫

猿

不ふまふふーれまく圓れまかやゑあー猿のふうにうるわ

鯛

安達の浦代鯛つる延びけすすめ約ほりてハ流すふう岸

鯉

圓ふくよともくひもれと波あれ掠よう理のねくわとく

鱸

出やおうねにの鱸枯風うら波めくまきて立まくら波

鰐

松浦うきよ小鯨の波あれハうれよけすまれ汐風

蟹

翁翁のとハ翁もかひあけよせよと我とくでうるのよ

津のふれをよにづきとくまくとくまくは

株

世のやハアモモモモモモモモモモモモモモモモ  
軒こすれ瓦碎けちちの株れ絶く月の流れ

鶯

かづくゆハアモモモモモモモモモモモモモモモモ  
鳩

野から風よのわ花の脇の高カマツと枝、それリス

雀

ニもれ行の春乃むきうきのいはやく雪の解

色をわらそ、人とよみげゆに、

花よさき宿よほつておのううふを残してさざれ

さよは葉を落てあうひ歌ともよよ。

あうひもああああああああああああああああ

東坡云佳若似佳人、

まむのひらとよかよののひりけへあわね我友

柔め搖高もと人、先度を悔不可帰、

あもあも井の水れもひよもひの度もれの友

活よ入活とむちわちわきよもひ活りて後のせや

おや堂のほ仰、茶筅のお乞しよ。

ま木もわぬそ竹の袖よなひま、ひざわの波も立まわ  
茶盒子をつゝきて、まよをきて、それをもつて

こもり、

あくびく、かきぬてもがたきぬの裸あらわすうあわら  
香煙一巻を向とむすりとむすりと  
疊まねまねの綱よろめかれて、ほの夜はよがわ  
河内の尼、尼、尼めひとよわづる。

淺水のわきまへたぬきにまくとせばひとう思ふ、

かづ

坐心庄

あくびくあくハ、あくはのひなひじやひなひ  
伴萬遠れかのとよき病よもすくまくまく、  
よもひそくのひよハ、まよとれまよふ年むづくわ  
病の歌、我よハ、とせとせとせとせ、うひよ  
ちへいひわけくわくわ、むづく今をわくへめく  
あよ唐の郭、洛陽の國まで、金匱言たまづ  
おつとおまくい歌のきくと、うきくともくと  
えんすんゆりさ、

そのおれおまきのりをめぐる  
え、うねりに在くの、傍らまわるよつて  
うめくわよき源氏のねづかと、つる  
よみてやゆ、一もぐりもまく、或ハニキ、もま  
ふくお三よのむ、たまはれおろそとく、そあ  
としよ、おゆもつぶいあきてよみづく、う  
のこころもあきうつんじよひ、ひ  
ささかまなづく、

桐壺

よひのこどもの口へよもやあせき

帚本

まみくよまめわづふ人のよて、ハくすまくすまく

六郎

やわ水せきの門をひきうち車ハあくまく重荷あり

タ郎

けやきと風かきあひて、あひて、あひて、の處

五郎

九重のゆふとまきよみかのゆーあひて、あひて、

木摘花

中川よとみの木摘花とまきよみかの野をむか

み葉聲

りみちをまよふは風うへて手付とぞといふアモ

花寫

うえも表せぬあきらかにわらじと落花揚をさわひ

落

わわおやねまひとくの歌ひとがととれうぢ

さつ木

神風の仕事ハアシカケハ柿のねあひきん

花教里

をひきよてけよきう柄れ花ある扇ひとくのどほ

波ナ

うううナハムサカツセモだくわきのうとよまで

波石

却よりもひそれ瀧の波あひよかつて白い波よまくも

漂漂

ちくちくハうきと墨の波よめくひくもくも

蓬生

ああこのかけとまるとひいてまくあわきの門のまく

開左

くよひよき一室にあは坂れぬよす御のりあわ

絃合

涼まの浦よまみにてと拂はうてくちてきふをひ

松風

うわ来て我病なりしむらすなれへるされねのわい。

鶯

さわせばむかまがわうらむおよし我をひまつ

朝鳥

ゆきあれ花田八色をわくもむとうておもたの白あ

そとめ

城とくらかうれすおれまくらてわくぬと庭ひまわら

三三三

玉うさ

筑はれどりのよがくらむておもをほうやわくん

初鳥

雪みてほく谷出一葉れ青のすこはは葉せこほくえ

胡蝶

きの日とくくわゆのとぞ花様のゆくい花のちかよひよ

螢

るのとくくわゆのとぞ花様のゆくい花のちかよひよ

秋夏

稀よ秋よ庭なづけの水よかくわゆのとぞ花のゆくよ

かわ少

野人

ましの小蘿れどもよもぎの風  
幻章

蘇詩

まほむ

梅之枝

寫れ葉立の鳥たちの音も昇るやうのよし

卷之三

わざわざひきいぬをのよつて葉をあらわせ  
下

柏木

मृत्यु विषय का अध्ययन

横笛

取つよとのうよせ笛のまのうかくすけむかづ

鈴虫

さねむすめーと笛竹のかへりかとまなまでうよ

タ嘉

まひぐるの葉せせらぎあてもとれ小野のみわ

御法

花やまつまむとまーとへ野口れ焼のまくら

約

まきひき流すまかくひくえひうつ草むら

二二六十四

匂宮

青みぬくうれ柳みくはきひおれぬまいまよわ

紅梅

おでやう花よくとくいれがことひくはく

竹弓

みれ其のたまひわとまくへきく一拂ひちわぬ

榜題

部よせつとあくふけあくまをくへきのひ

椎う牛

あくねうせくうのあくほーせんひまくへさん

總角

あらひのむかしのうきは  
まつりのまつりのまつり

甲辰

法のほんぢをよみこねよか(もつて)野ざつものよめ

卷之三  
四  
河

游  
余

河の波の音

精  
珍

アリバトウノカタシマニシテ  
アリバトウノカタシマニシテ

夏淳樓

おもてなすがおもてなすがおもてなすがおもてなすが  
おもてなすがおもてなすがおもてなすがおもてなすが

二子園ら

